

朝鮮語研究会の教育活動と教育内容及び 隠れた教育目標

—朝鮮語奨励試験との関連性を中心に¹—

呉 大 煥

はじめに

1. 分析の対象—「朝鮮語研究会」の主な刊行物
2. 「朝鮮語研究会」の教育活動に関して
3. 朝鮮語研究会の教育内容

おわりに

はじめに

「朝鮮語研究会」(会長:李完応)は、朝鮮語教育用雑誌『朝鮮文朝鮮語講義録』(以下、『講義録』と称す)を始めとし、約20種を超える朝鮮語学習書を出版した団体であり、最新の研究成果である植田(2009b、2010)によると少なくとも1924年から1944年まで活動していたものと考えられている。また、오대환(2009b:63-67)で考察したように、この団体の主な活動目的は「朝鮮文朝鮮語の研究とその普及」であったことが、同団体の規程からも分かる。しかし、規程には団体の目的などは明示されているが、この団体の教育団体としての教育目標に関しては示されていないため、その教育目標についてはまだ明らかになっていない。오대환(2009b)でも教育内容については論じたが、教育目標については十分に議論することが出来なかった。

本稿の目的は、これまで十分に議論されてこなかったこの団体の教育目標を明確にするため、「朝鮮語研究会」が出版した『講義録』と『月刊雑誌朝鮮語』を考察し、それらが

1 本論文は、第20回日韓・日朝交流史研究会(2009年11月27日)での研究発表(「朝鮮語研究会の教育活動と教育内容」)を修正したものである。また、2008～2010年度科学研究費補助金(基盤研究B)「学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」(課題番号:20320081)(研究代表者:植田晃次 大阪大学准教授、研究分担者:矢野謙一 熊本学園大学教授・呉大煥)による成果の一部である。共同研究の際、さまざまな情報の提供や助言を下さった植田晃次・矢野謙一両先生にお礼を申し上げたい。

当時の朝鮮語奨励政策による朝鮮語試験といかなる関連性を持っていたのかを探ることにある。この団体の教育目標を明らかにしたうえで、さらにはこの団体の朝鮮語教育活動とその内容の特徴を明確にすることもここでの目的としたい。

本稿では、第2節でこの団体の著作物の中から分析の対象を限定し、第3節でこの団体が行った朝鮮語教育の教育活動について考察する。第4節では『講義録』の記事や教育内容と朝鮮語奨励試験との関連性を考察して規程に明示されていない教育目標を明確にし、その教育目標の下で行われた朝鮮語教育の教育課程などについて考える。

1. 分析の対象—「朝鮮語研究会」の主な刊行物

「朝鮮語研究会」の刊行物に関する報告には、山田（2004）、植田ほか（2006、2007）、植田（2009a,b、2010）がある。植田（2009a）の目録に拠りつつ、学習対象者、形式、雑誌と出版物の関連性などに沿って「朝鮮語研究会」の刊行物を分類したものが表1²である。

表1 「朝鮮語研究会」の刊行物の分類

		書名	
朝鮮語教育用	日本人学習者用	雑誌	朝鮮文朝鮮語講義録（1924.9.-28.9. 12号3回） 月刊雑誌朝鮮語（1925.10-29.1 1回40号まで） 中等朝鮮語講座（1931.8-33.11 9号まで）
		単行本	朝鮮語発音及文法（1926.4） 朝鮮語第3種受験者必携（1927.5） 朝鮮文朝鮮語講義録合本（1928.3） 日鮮単語対訳集（1929.2） 朝鮮語試験問題並訳文集（1930.6） 普通学校朝鮮語読本 訳解（1933.12）
		その他	警察官 朝鮮語教科書（1928.1） 中等学校 朝鮮語教科書（1928.3） わかりやすい朝鮮語会話（1934.11） 内鮮共用書翰文集（1937.2）
		辞典類	鮮和新辞典（1930.1）
	朝鮮人学習者用		中等教科 朝鮮語文典（1929.1） 中等学校 朝鮮語文法（1935.12）
その他			科学小話（1944.7） 女学校（1944.9）

2 表1は、오대환（2009b：127）の表22を日本語に訳したものである。

3 派生本とは、오대환（2009b：127）で定義したように、『講義録』と『月刊雑誌朝鮮語』に掲載された記事の内容をそのまま単行本にしたり、その記事を膨らまして単行本にするなどして出版したものを意味する。

表1の刊行物のうち、本稿では辞典類を除いた日本人のための朝鮮語学習書に限定して一次的な分析の対象とする。また、次節では朝鮮語学習書の中から学習者を対象にする教育用の著作を一般学習書と区分して、議論の対象にする。

2. 「朝鮮語研究会」の教育活動に関して

「朝鮮語研究会」による朝鮮語教育の内容を明らかにするためには、実際にこの団体が特定の学習者を教育の対象にして教育活動に携わっていた時期と著作物を明確にする必要がある。特定の学習者を対象にし、その学習者に対して教育サービスとして提供するものが教育内容であるため、一般販売用の学習書・教材とは区分して分析すべきであると考えられるからである。

「朝鮮語研究会」の活動については、梶井（1980、1984）、山田（2004）、植田ほか（2006、2007）など朝鮮語教育史に関する研究で部分的に言及されてきた。「朝鮮語研究会」の活動を直接の研究対象にして取り上げた植田（2009a、2010）では、「実質上は通信教育の雑誌発行が中心であり、それと関連したものを含めた図書の出版も行った」と報告されている。ようするに、入会した会員を対象とした雑誌による「通信教育」が主な活動であり、それにあわせて関連図書の出版も行っていたという見方である。

この見解をふまえつつ筆者は、오대환（2009b）で『月刊雑誌朝鮮語』の刊行が終わった1929年頃⁴、または『講義録』第3回の刊行が終わった1928年頃を境に、この団体の性格及び活動の内容が教育を中心としたものから出版に重点をおくものへと変化したことを示した。この団体の活動期間から見ると、朝鮮語教育用の雑誌刊行による「教育活動」の期間は5年間に過ぎないこと、また1944年の出版物⁵は朝鮮語教育との関連性が全くないことから、表2のように活動の時期を三つに分けて考えるべきであるというのが筆者の見解である。

4 1930年から1933年まで発行されていた『中等朝鮮語講座』は、『講義録』と『月刊雑誌朝鮮語』に続いて発刊された雑誌と思われる。しかし、月刊誌としての形態を維持することができず、また連載していた記事も完結していない事から、失敗に終わったものと推測される。また、『月刊雑誌朝鮮語』第30号の題言によると、1928年3月の時点で会員数が急減したという。それらをふまえて推測するとするならば、教育活動の機能は既に1928年で失われていた可能性もある。

5 植田（2009a、2010）参照

表2 「朝鮮語研究会」の活動の内容の変化

	活動の特徴
第1期 (1924～1929)	特定の学習者（会員）を対象にして通信教育のための雑誌を発行し、教育活動を行った時期。また、その雑誌の記事あるいは関連があるものを単行本として出版していた。教育団体としての雑誌発行による教育活動が主な活動であり、派生本の出版・販売などは付随的な活動であったと見られる時期。
第2期 (1930年代)	『中等朝鮮語講座』という教育用の雑誌は発行していたが、この雑誌の終刊は確認できず、途中で刊行中止となったと思われる。雑誌発行による教育活動が終わり、警察官対象の朝鮮語学習書の出版を主な活動として行っていたと見られる時期。
第3期 (1940年代)	朝鮮語教育用の出版物に関する広告から既刊出版物の販売は行っていたと見られるが、新しい学習書は刊行していない時期。

表2のように、特定の日本人学習者（雑誌の講読会員）に対して教育活動を行っていたと言えるのは、第1期のみである。学習書の出版と教育活動は同じではないため、両者は区分されなければならない。第2期以後は、まともな教育活動は行われず、学習書・参考書などの出版が主な活動であったと思われる。したがって、この団体が教育団体として主に活動していたのは、初期の5～6年間のみである。1930年代以降は、教育活動よりむしろ出版活動がこの団体の中心的な活動であったとも言えよう。

3. 朝鮮語研究会の教育内容

朝鮮語研究会の規程は、『講義録』第1回第1号に掲載されているものが初版と見られる。その後、『講義録』第1回第10号に改定版の規程が掲載され、『講義録』第2回の発刊と同時に再び改定された規程が、第2回第1号⁶と後続誌である『月刊雑誌朝鮮語』に公表されている。その後、他の著作物や刊行物からはこの団体の規程は全く発見されておらず、2次改定以降は規程が有名無実となり、朝鮮語研究会の教育機関としての性格も弱くなったのだと思われる。

団体の性格を表す規程には、「講演会、講習会、懇談会など」の対面教育を行う旨が記されているが、それが実際に行われていたのか否かは現時点では不明である。しかも、『講義録』第2回の刊行に伴い改定された規程では、「講演会、演習会」などの記述が削除されているので、少なくとも1926年以降はこのような対面教育は行っていなかったと思われる。そのため、ここでは朝鮮語研究会の教育活動は、一般的な対面教育という形ではなく、主に雑誌発行による通信教育⁷という形式で行われていたと想定し、この形式におけ

6 研究会発表の時点では、1926年10月から刊行された『講義録』第2回の原本は確認できていなかったが、延世大学中央図書館蔵の『講義録』第2回第1号にも2次改定規程が掲載されていることを確認した。

る朝鮮語教育の内容を考察・分析する。

(1) 「朝鮮語研究会」の活動目的

「朝鮮語研究会」の活動目的については、『講義録』第1回第1号・第10号と第2回第1号（『月刊雑誌朝鮮語』第14号にも2次改定規程が掲載されている）に掲載された朝鮮語研究会の規程から読み取ることができる。

表3 「朝鮮語研究会」規程の目的関連条項

	目的
初回の規程 第1回第1号 から (1924.9～)	第二條 本會ハ朝鮮文朝鮮語ノ研究並ニ其ノ普及ヲ圖ルヲ以テ目的トス 第三條 本會ハ前項ノ目的ヲ達シ且内鮮融和二資スル爲メ毎月一回朝鮮文朝鮮語講義録ヲ発行シ會員ニ頒ツモノトス 又講演會講習會或ハ談話會ヲ開催シ本會ノ目的ヲ達成スルニ必要ナル事項ヲ行フ
1次改定規程 第1回第10号 から (1925.7～)	第二條 本會ハ朝鮮文朝鮮語ノ研究並ニ其ノ普及ヲ圖ルヲ以テ目的トス 第三條 本會ハ前項ノ目的ヲ達シ且内鮮融和二資スル爲メ毎月一回朝鮮文朝鮮語講義録ヲ発行シ會員ニ頒ツ 又講演會講習會或ハ談話會ヲ開催シ本會ノ目的ヲ達成スルニ必要ナル事項ヲ布フ
2次改定規程 第2回第1号 から (1926.11～)	第二條 本會ハ朝鮮文朝鮮語ノ研究並ニ其ノ普及ヲ圖ルヲ以テ目的トス 第三條 本會ハ前項ノ目的ヲ達スル爲メ毎月一回「朝鮮文朝鮮語講義録」並ニ「월간잡지朝鮮語」ヲ発行シ會員ニ頒ツ 又講演會講習會或ハ談話會ヲ開催シ本會ノ目的ヲ達成スルニ必要ナル事項ヲ行フ

表3の「2次改定規程」は、『講義録』の第2回の刊行に伴い2種類の雑誌を刊行することとなったことから改められたものである。

規程を見ると、この団体は「朝鮮文朝鮮語の研究」と「その普及」を目的としていたことが分かる。ここで注目すべき点は、「朝鮮文」を強調していることである。その理由については、『講義録』第1回第5号の舎廊房（雑纂28頁）に次のように記載されている。

.....朝鮮に二十年も三十年も居る人達が朝鮮語は自由自在（不規則ながら）でありながら朝鮮文に至っては全然ダメな人達が多い爲に、此等を見聞しておられる初学者の方々が講義録によって朝鮮語を習っても朝鮮文は学び得ないものなるかに思われる向がありはすまいかという一種の婆心から.....

このような理由から朝鮮文という三文字を講義録の題字に入れて教育の内容として扱っ

7 植田（2010：31）、오대환（2009b：120-122）参照

たのである。

ところが、その時代には、朝鮮語の綴字法や文法、標準語、文体等はまだ定まっていなかった。しかも社会における共通語は日本語であった。そのため、日本人としては朝鮮語で書かれた朝鮮文を読み書きする機会も必要性もほとんどなかったといえる。しかし、1921年に始まった「朝鮮語奨励政策」による「朝鮮語奨励試験」等の各種の朝鮮語試験の受験という社会的な要求が生じたため、この試験を受験する総督府の官吏などにとっては、朝鮮語の読み書きが必要不可欠なものとなったのだった。

以上のことから、「朝鮮語研究会」の活動目標は、「朝鮮語奨励試験」などの朝鮮語試験の受験者に朝鮮文を含めた朝鮮語の教育を提供し、普及させることであったと考えられる。

（2）教育活動と朝鮮語奨励試験との関連性

「朝鮮語研究会」と「朝鮮語奨励政策」との関連性については、既に梶井(1984:120)が、「朝鮮語奨励規程」により朝鮮語学習が官から民へと移行していった過程でこの団体の『講義録』と『月刊雑誌朝鮮語』という二つの雑誌が登場したことを指摘している。また、山田(2004:201)は「同誌は日本人に朝鮮語学習を奨励することを目的として発刊されたものではあるが、総督府や朝鮮語奨励試験との関連が深く、試験関係の記事が中心となっており、朝鮮語奨励試験受験準備用の管制の雑誌といった色彩の濃いものであった」と、具体的な分析は行わずに『講義録』を印象論的に評している。筆者も오대환(2009b:47-62)で朝鮮語奨励政策がこの団体が組織された背景にあり、また衰退する原因にもなっていたと主張した。しかし、残念ながらこの政策と「朝鮮語研究会」の教育活動との関連性が明示されている記録はなく、時代的・社会的状況から関連性を示唆してきたというのが現状である。

本節では、『講義録』の記事分析から朝鮮語奨励試験との関連性をより具体的に考える。朝鮮語試験と関連がある様々記事は、『講義録』第1回では、朝鮮語科目関連の記事以外の内容、すなわち「雑纂」などに掲載されている。

『講義録』第1回⁸の「雑纂」の内容のうち奨励政策と関連のあるものを整理すると表4のようになる。

8 第1回の雑纂は、「ソウル大学本」（中央図書館蔵）と「農林本」（ソウル大学農業科学図書館蔵）を比較して、各号の内容を把握したものである。

表4 『講義録』第1回の雑纂の試験関連内容⁹

	奨励政策及び官吏対象の各種朝鮮語試験関連記事の量
第1号	①朝鮮語奨励規程 1-3 ②朝鮮語試験問題（十三年五月三十日施行 乙種試験問題）4-5 ③（十二年八月廿八日施行 甲種試験問題）5-8 ⇒ 全12頁のうち8頁 ④朝鮮語試験合格者名簿 1-16
第2号	①警察官の資格と朝鮮語 1 ②朝鮮語試験問題（大正十三年九月廿六、七日施行 第二種試験問題）2-4 （大正十年十二月中旬施行 甲種試験問題）5-11 ⇒ 全15頁のうち11頁
第3号	①朝鮮語試験問題（大正十二年三月廿四日施行 乙種朝鮮語試験問題）15-18 ②（大正十一年十一月施行 甲種朝鮮語試験問題）18-24 ③（大正七年七月施行 乙種朝鮮語奨励試験問題）24 ④第一種試験施行 25 ⑤第二種試験合格者氏名発表 25 ⑥試験官側の意見 30 ⇒ 全30頁のうち12頁
第4号	①試験問題翻訳（本誌第一号掲載分）17-22 ⇒ 全28頁のうち16頁
第5号	①試験問題翻訳（大正十三年九月廿六七日施行 第二種試験分）3-5 ②（大正十年十二月中旬施行 甲種試験）5-8 ③京城府の鮮語試験 2月10日施行【規程改定の案内 ¹⁰ 】8 ④最近施行された第一種試験の問題と其の訳文（今年一月二十、二十一日施行 第一種試験問題）20-25 ⇒ 全29頁のうち17頁
第6号	①試験問題翻訳（第2号掲載分 第5語に続き）11-15 ⇒ 全28頁のうち5頁
第7号	①試験問題翻訳（本誌第3号掲載分）7-14 ⇒ 全22頁のうち8頁
第8号	①試験問題翻訳（本誌第3号掲載分 続）7-9 ②京畿道通訳試験 試験問題と訳文（三月下旬施行 警察官の通訳兼掌試験）9-11 ⇒ 全18頁のうち5頁
第9号	①各道通訳試験（三四月各道警察部で施行 警察官通訳兼掌試験） 慶北（三月）、咸南（三月二十二日）、全南（四月二十五日）、黄海道（三月二十三日）、咸北（* ¹¹ ）、忠北（三月）11-24 ②民刑事熟語 24 ⇒ 全24頁のうち15頁
第10号	①朝鮮各憲兵隊 試験問題及其訳文 （大正十二年度憲兵朝鮮語通訳試験問題）5-6 （大正十三年度憲兵朝鮮語通訳試験問題）6-7 （大正十二年度憲兵補国語通訳試験問題）7-8 （大正十三年度憲兵補国語通訳試験問題）8-9

9 「雑纂」の内容を整理するにあたっては、矢野先生の表を参考にした。

10 筆者注。

11 括弧内の日付は各道の試験実施日の情報であるが、咸北だけは記されていない。

	(大正十四年度憲兵補国語通訳試験問題) 9 (訳文) 10-14 ②各道通訳試験 14-24 忠南 (* ¹² 甲種筆記、乙種筆記試験)、全北(四月二十五日内地人警部補及巡査に 試行)、平北(三月二十五日施行)、江原道(掲載を省略) ③各道通訳兼掌試験 合格者氏名 25-26 ⇒ 全26頁のうち22頁
第11号	⇒ 全9頁のうち0頁
第12号	①三種朝鮮語試験問題及訳文(大正十四年八月十九日施行) 3-5 ②地方試験委員 5-7 ③三種試験受験者数 7-9 ④普通文官試験 朝鮮語問題(八月八、九日施行) 10 ⇒全13頁のうち8頁

表4から分かるように、第12号までの「雑纂」計254頁のうち、奨励試験のみならず
官吏対象の様々な試験と関連がある記事が127頁を占めている。この数字は、各種朝鮮語
試験の模擬試験のような「仮設試問」¹³の18頁を加えると「雑纂」全体の6割近くとなる。
このように朝鮮語試験に関する情報に大きな紙幅が割かれていたという事実は、『講義録』
の会員と朝鮮語試験との間に密接な関連性があることを証明する根拠の一つとなると思わ
れる。

更に、『講義録』第2回には、全80頁の「朝鮮語試験問題集(以下「問題集」と称す)」
として朝鮮語奨励試験の過去問題が一つの科目のように構成されて掲載されており、各号
の目次にも記載されている。第1回では、奨励試験以外の朝鮮語試験問題も扱っていたが、
第2回からは、奨励試験に絞られたのも特徴的である。「問題集」に収録された試験は以
下のとおりである。

- ①大正十年八月廿五日、六日施行 乙種試験問題
- ②大正十年十二月十五、六、七日施行 甲種試験問題
- ③大正十一年八月五、六日施行 乙種朝鮮語試験問題
- ④大正十一年六、七、八日施行 甲種朝鮮語試験問題
- ⑤大正十二年三月廿四日施行 乙種朝鮮語試験問題
- ⑥大正十二年八月廿八、廿九、卅日施行 甲種試験問題
- ⑦大正十三年五月三十日施行 乙種試験問題
- ⑧大正十三年九月廿六、七日施行 第二種試験問題
- ⑨大正十四年八月十九日施行 第三種試験問題

12 試験実施の日付なし。

13 第8号から毎号連載したもので、主に訳文問題となっている。

他にも、「警部警部補 語学考試試験問題」1頁半、「答案を詮衡して＝出題者としての感想」など5頁半、合格者名簿など5頁と「問題集」に収録されていない「第二種試験問題(大正十五年十一月十九日、二十日)」6頁、「第一種試験問題(昭和二年一月十一、十二日)」8頁、「第三種試験問題(昭和二年六月九日)」3頁など、「問題集」と合せて合計107頁以上が試験関連記事で構成されていることが分かる。

第3回の誌面構成は全体的に第2回と同様であるため、朝鮮語試験関連の記事は「問題集」80頁に加えて「第三種試験問題(昭和二年六月九日)」、「第二種試験問題(大正十五年十一月十九日、二十日)」、「第一種試験問題(昭和二年一月十一日、十二日)」によって構成されている。ただし、「警部警部補 語学考試試験問題」は省かれ、かわりに「普通文官試験朝鮮語問題」が追加されている。

このような『講義録』の誌面構成の側面から、この団体の朝鮮語教育の隠れた目標は奨励試験などの朝鮮語試験に合格者を出すことであったことが確認できる。

この主張を裏付ける根拠として、『月刊雑誌朝鮮語』第12号(1927.6:63)に掲載された舎廊房の記事に注目したい。以下の内容は『講義録』第2回の刊行に当って「新講義録と旧講義録との差異如何」について質問した読者(第1回の卒業者)への回答である。

.....第1回発行当時(十三年九月)にも科目其他は餘程考案の上編纂した、ものでしたが、其の後の朝鮮語試験の実際に照らし合わすと少し不備の所のあることが発見されたので大分改版します。また累次の朝鮮語試験に国文国語の鮮訳が他の科目に比して不成績ということですから今回はその方面の科目を増加して其の缺を補うことにいたしました.....

このように、朝鮮語試験は『講義録』に内容修正を迫るほどの影響力をもっており、「朝鮮語研究会」の教育の焦点となっていたと言える。

次節では、朝鮮語試験の影響がこの団体の朝鮮語教育にどのように反映されていたのかを検討してゆきたい。

(3) 教育科目の特色

『講義録』が現れるまで、ほとんどの朝鮮語学習書の内容は、「諺文(及び発音)」と「会話」によって成り立っており、「文法」が含まれているものは多くなかった。同時代の『語法会話 朝鮮語大成』(奥山仙三、1929)の構成を見ても、「語法」の部分に「諺文」と「文法」、「会話」の部分に会話文と対訳という形で構成されている。しかし、『講義録』は、その規程に明示されているように多種多様な科目で構成されている。

表5 「朝鮮語研究会」規程の科目関連条項

	科目関連の規程
初回の規程 (1924.9～)	第九條 講義科目ノ大要左ノ如シ 一、朝鮮語ノ発音及文法、二、朝鮮語会話、三、朝鮮語書翰文例 四、 <u>国文解釈</u> 、 <u>鮮文解釈</u> 、五、朝鮮語学習上ノ注意、六、朝鮮語文章講話、七、 <u>朝鮮地理及歴史梗概</u> 、八、朝鮮単語及熟語 其他科外講義トシテ朝鮮ノ風俗、習慣、伝説、迷信、冠婚、葬祭、俚諺、 <u>吏読法等</u>
1次改定規程 (1925.7～)	第九條 講義科目ノ大要左ノ如シ 一、朝鮮語ノ発音及文法、二、朝鮮語会話、三、朝鮮語書翰文例、四、 <u>国文鮮訳</u> 、 <u>鮮文国訳</u> 、五、朝鮮語学習上ノ注意、六、朝鮮語文章講話、七、朝鮮単語及熟語 其他科外講義トシテ朝鮮ノ風俗、習慣、伝説、迷信、冠婚、葬祭、俚諺、 <u>但、講師ノ都合ニヨリ更變スル事アルベシ</u>
2次改定規程 (1926.11～)	第八條 講義科目ノ大要左ノ如シ 一、朝鮮語ノ発音及文法、二、朝鮮語会話、三、朝鮮語書翰文例、四、朝鮮語文章講話、五、 <u>国鮮文対訳法</u> 、六、 <u>朝鮮式漢熟語</u> 、七、朝鮮語学習上ノ注意 其他科外講義トシテ朝鮮ノ風俗、習慣、伝説、迷信、冠婚、葬祭、俚諺其他、 <u>但講師ノ都合ニヨリ變更スル事アルベシ</u>

このように、発音、文法、会話だけではなく、他の学習書には見られない科目が多く含まれていることが分かる。特に、朝鮮語の書翰文や朝鮮文章講話など朝鮮文教育に関する科目が多種あることが特徴的である。また、最初の規程では8科目あったものが1次改定で7科目になっている¹⁴。更に、2次改定の規程では『講義録』及び『月刊雑誌朝鮮語』の科目が「国鮮文対訳法」や「朝鮮式漢熟語」のように試験対策としてより効果的な科目へと変更されていることが分かる。

前節で述べたように、「朝鮮語研究会」の朝鮮語教育は朝鮮語試験と深い関連性を持っていた。この団体が提供していた朝鮮語教育の内容を、朝鮮語奨励試験科目と比較してみるとそれがよくわかるだろう。

表6 「朝鮮語奨励試験」規程の試験科目

1924年 改定規程	1928年 改定規程
第1種試験 1. 解釈：鮮語国訳、国語鮮訳 2. 訳文：鮮文国訳(諺文まじり文)、国文鮮訳(仮名まじり文) 3. 作文：諺文まじり通信文 4. 対話：鮮語及び国語の解釈、鮮語口述	第1種試験 1. 解釈：鮮語国訳、国語鮮訳 2. 訳文：鮮文国訳(諺文まじり文、朝鮮式漢熟語)、国文鮮訳(仮名まじり文) 3. 作文：諺文まじり通信文 4. 対話：鮮語及国語の解釈、鮮語口述

14 これは朝鮮地理と歴史に関する試験問題がなかったことに起因していると思われる。

<p>第2種試験</p> <p>1. 解釈：鮮語国訳、国語鮮訳</p> <p>2. 訳文：鮮文国訳(諺文まじり文)、国文鮮訳(仮名まじり文)</p> <p>3. 書取：諺文の聴取及訳記</p> <p>4. 対話：鮮語及国語の解釈、鮮語口述</p>	<p>第2種試験</p> <p>1. 解釈：鮮語国訳、国語鮮訳</p> <p>2. 訳文：鮮文国訳(諺文まじり文)、国文鮮訳(仮名まじり文)</p> <p>3. 書取：諺文の聴取及訳記</p> <p>4. 対話：鮮語及国語の解釈、鮮語口述</p>
<p>第3種試験</p> <p>1. 単語解釈：鮮語国訳、国語鮮訳</p> <p>2. 連語解釈：同上</p> <p>3. 書取：諺文聴取及び訳記</p> <p>4. 対話：鮮語及国語の解釈、鮮語口述</p>	<p>第3種試験</p> <p>1. 解釈：鮮語国訳、国語鮮訳</p> <p>2. 書取：諺文の聴取又は訳記</p> <p>3. 対話：鮮語及国語の解釈、鮮語口述</p>

表6の試験科目の評価方法は、山田(2004:81)の説明によると以下のものであった。

「解釈」は1～2行の文を朝鮮語から日本語に訳すものと、日本語から朝鮮語へ訳すもの(……)

「訳文」は1～2行の文を朝鮮語から日本語へ、日本語から朝鮮語へ訳すもの(……)

「書取」は試験管が朝鮮語の文を3回繰り返して読み、それをそのまま朝鮮語で書き取る問題と日本語に翻訳して書き取る問題の2種類(……)

「対話」は、与えられた朝鮮語の文を音読し口頭で日本語に訳す問題(……)

以上のことから、この試験はoral test形式(対話)も含まれるものであったことが分かる。したがって、朝鮮語奨励試験の特徴を整理すると①言語能力のレベルについての概念があり、②listeningやspeakingの言語機能¹⁵まで評価の対象とし、③試験科目が細分化していた、といえる。

このような試験科目のあり方が「朝鮮語研究会」の教育内容を決定していたものと思われる。さらには、『講義録』第1回12号「卒業各位に告ぐ」における朝鮮語研究会による説明では、『講義録』は第3種試験程度、『月刊雑誌朝鮮語』はそれ以上のレベルの内容であるとされていることから、試験のレベルに合わせて学習レベルを決めていたと考えられる。

このように、『講義録』や『月刊雑誌朝鮮語』の科目は試験科目のレベルに合わせて構成されており、この試験と『講義録』による朝鮮語教育は密接な関連性を持っていたと言える。

15 しかし、近代言語教育学の言語能力と異なる点は、主に翻訳・解釈の形式が多く、技術的な言語能力の測定に止まっていたことである。

(4) 『講義録』の教育目標と教育課程

本節では、雑誌という媒体を利用して通信教育を行ったこの団体の朝鮮語教育はどのような方法で行われていたのかを考えてみたい。

植田(2009a)が指摘したように、この雑誌の構成において特徴的なのが各記事の掲載方法である。各記事の内容を分割して連載したため、記事の全文を読むためには12号まで、あるいは連載が終わるまで記事を集める必要があった。このような構成は学習者にとっても利用しにくいものであったのか、오대환(2009b:145-149)で報告したように、『講義録』第2回第2号には「本講義録学習の順序」という説明文が掲載されている。この説明文の内容を見ると、現代の教室授業とは異なり、学習者の能動的な学習が主な教育方法であったことが分かる。教育に関わる講師の役割は、毎月適切な量の教育内容を文字化し記事として提供するというもの限定されていた。提供されたテキストを利用し、学習者が主体になって「学習」する方法がとられていたのである。

このような方法をはたして教育方法と言えるのかという問題はあるが、各回の『講義録』が完結する時期には「卒業試験」が行われており、原始的であるとはいえ課程を揃えた教育方法であったと認めることができる。一定期間の教育内容の習得度を評価し、教育の成果を教育提供者が確認することで、教育課程の完結をみたものと思われるのである。

しかし、『講義録』の次のレベルである『月刊雑誌朝鮮語』は、このような卒業試験制度を備えておらず、学習期間も定められていない。したがって、この雑誌は、教育課程を持つ教育制度であったと認めることができるか疑問である。卒業試験がなくなった理由として考えられるのは、教育目標が様々な朝鮮語試験への合格者を出すことであったため、この団体の教育課程を修了することよりも「朝鮮語奨励試験」などの試験に合格することの方が社会的な評価もおそらくは高かったということである。そのため、卒業試験が意味を持たなかったのではないと思われる。

元々雑誌による通信教育という不安定な教育課程に依っていたを持っていたこの団体の朝鮮語教育は、卒業試験という制度がなくなることにより、教育課程の完結性を欠くものとなった。結局、以降の雑誌である『月刊雑誌朝鮮語』や『中等朝鮮語講義録』などは教育課程を持っていたとはいえないものになったのである。

このように、この団体が最小限の課程を持って朝鮮語教育活動を展開していたのは『講義録』第3回の完結までであったと考えられる。すなわち、教育機関として、一定の期間と教育課程をもって実質的に教育活動を行った時期は、3回分の『講義録』の刊行時期に限られると考えることができる。

おわりに

以上のように、「朝鮮語研究会」の教育活動を考察した結果、実質的に教育課程を持っ

て教育活動を展開していた時期は『講義録』第1回から3回の終刊までの1924年から1928年の数年間であり、その教育内容は朝鮮語奨励政策の試験制度と緊密な関連性を持っていたこと、さらには朝鮮語奨励試験などの朝鮮語試験に合格者を出すことが教育目標となっていたことが確認できた。

試験対策として構成されていたという限界を抱えつつも、こういった教育活動は朝鮮語教育の内容と方法に以下のような発展をもたらしたと考えられる。

- ①言語能力のレベルを考慮した教材の開発
- ②朝鮮語科目の細分化
- ③朝鮮語学習法の詳細化
- ④原始的な教育課程の設立
- ⑤言語到達度の評価

しかし、この団体の朝鮮語教育は、根本的に「朝鮮語奨励政策」を背景とし、朝鮮語試験に合格者を出すことを教育目標としていたため、朝鮮語奨励政策の変化に伴い教育活動を継続することが困難となったと思われる。

参考文献

- 山田寛人 (2004) 『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策 朝鮮語を学んだ日本人』 不二出版
- 梶井陟 (1984) 『朝鮮語を考える』 龍溪書舎
- 植田晃次 他 (2006) 『朝鮮語教育史人物情報資料集』 研究成果報告書 (課題番号 17320085)
- 植田晃次 他 (2007) 『日本近現代朝鮮語教育史』 研究成果報告書 (課題番号 17320085)
- 植田晃次 (2009a) 「朝鮮語研究会とその活動」第223回朝鮮語研究会 発表文
- _____ (2009b) 「『朝鮮文朝鮮語講義録』異本研究」第60回朝鮮学会 発表文
- _____ (2010) 「朝鮮語研究会(李完応会長・伊藤韓堂主幹)の活動と民間団体としての性格」『言語文化研究』第36号、大阪大学大学院言語文化研究科
- 呉 大煥 (2009a) 「『朝鮮文朝鮮語講義録』の発音法に関する二つの記事の内容分析——学習書の分析基準を定めるために——」『総合政策論叢』第17号、鳥根県立大学総合政策学会
- 오대환 (2009b) 식민지 시기 일본인을 위한 조선어교육 연구 - '조선어장려정책' 과 '경성 조선어연구회' 를 중심으로 -, 연세대학교 박사학위논문

キーワード 朝鮮語研究会 教育目標 朝鮮語試験との関連性

(OH Daewhan)